

① 申請者	◎雲南市、安来市、 奥出雲町	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
いづものくに 出雲國たたら風土記 ～鉄づくり千年が生んだ物語～			
④ ストーリーの概要（200字程度）			
日本古来の鉄づくり「たたら製鉄」で繁栄した出雲の地では、今日もなお世界で唯一たたら製鉄の炎が燃え続けています。たたら製鉄は、優れた鉄の生産だけでなく、原料砂鉄の採取跡地を広大な稲田に再生し、燃料の木炭山林を永続的に循環利用するという、人と自然とが共生する持続可能な産業として日本社会を支えてきました。また、鉄の流通は全国各地の文物をもたらし、都のような華やかな地域文化をも育みました。			
今もこの地は、神代の時代から先人たちが刻んできた鉄づくり千年の物語が終わることなく紡がれています。			
			
今も舞い上がり続ける「たたら製鉄」の炎		たたら製鉄が生み出した独特な棚田の景観	
			
全国各地の民謡の影響を受け生まれた「民謡安来節」		たたら製鉄がモチーフともいわれるヤマタノオロチ退治神話を伝える神楽の舞	
⑤ 担当者連絡先			
担当者氏名	雲南市役所 産業振興部 商工観光課 主幹 鈴木 佑里子		
電 話	0854-40-1054	FAX	0854-40-1059
E-mail	suzuki-yuriko@city.unnan.shimane.jp		
住 所	島根県雲南市木次町里方 521-1		

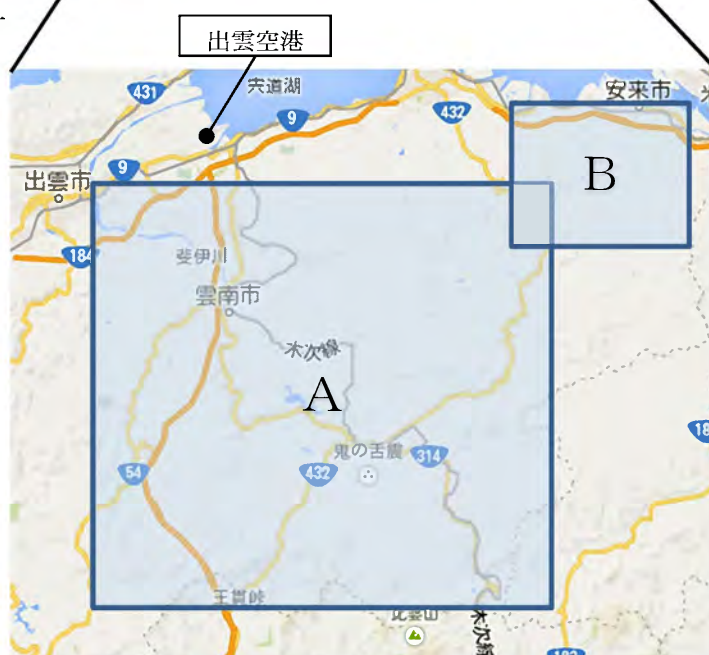
市町村の位置図（地図等）

雲南市・安来市・奥出雲町は、島根県の東部に位置し、鳥取県と広島県に接する。中国山地に源を発した斐伊川・飯梨川などの流域で、大半が山間地である。それぞれの中心部への鉄道でのアクセスは、安来市は JR 山陰本線安来駅、雲南市は JR 木次線木次駅、奥出雲町は JR 木次線出雲三成駅及び横田駅が最寄りとなっている。また、自動車道でのアクセスは、雲南市は中国横断自動車道尾道松江線の三刀屋木次 IC、安来市は山陰自動車道安来 IC、奥出雲町は中国横断自動車道尾道松江線の吉田掛合 IC 及び高野 IC となっている。また、出雲空港から 3 市町の中心部までは 25 分から 50 分を要する。

島根県



雲南市、安来市、奥出雲町



構成文化財の位置図（地図等）」

※構成文化財がある地域を拡大し、構成文化財の位置を示す

(様式 2-1 の番号に対応させること)





ストーリー 「出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～」

たたら製鉄の幕開け

島根県東部の出雲地方では、約1400年前から「たたら製鉄」と呼ばれる砂鉄と木炭を用いる鉄づくりが盛んに行われていました。天平5（733）年に書かれた『出雲国風土記』には、「この地で生産される鉄は堅く、いろいろな道具をつくるのに最適である」と、生産される鉄の優秀性が語られています。そして、江戸時代後半から明治にかけての最盛期には、全国のおよそ8割の鉄が、当地を中心とした中国山地の麓でつくられていました。

なかでも奥出雲地域には、たたら製鉄の原料となる良質な砂鉄を含む花崗岩（真砂土）が広く分布し、燃料の木炭を得るための森林も広大であったため、これらの資源を求めて製鉄技術者が多数集まってきました。この歴史を象徴するのが、鉄づくりの神「金屋子神」が白鷺に乗ってカツラの木に舞い降り、製鉄の技術を受けたとする金屋子神話です。今日、「金屋子神社」の総本社がこの地に鎮座し、鉄づくり発祥の地として篤く信仰されています。

たたら製鉄を支える人々と環境

奥出雲を訪れると、豊かな山林に抱かれた広大な棚田が点在し、その棚田の中にポツンポツンと“こぶ”のような小山がある光景に気が付きます。これは山を切り崩して土砂を水路に流しながら砂鉄を採取する「鉄穴流し」が行われた際に、鎮守の杜や墓地など神聖な場所を削らずに残したものです。鉄づくりには、想像を絶する多くの山を切り崩すほど大量の砂鉄が必要でしたが、その跡地はそのまま放置されることなく、鉄穴流しで使用した溜め池や水路を利用して計画的に農地に再生し、1km以上も続く棚田の景観を至る所に生みだしました。さらに、砂鉄を採取した残りの土の大半は下流域に堆積して、現在の出雲平野や安来平野など、広大な穀倉地帯を形成したのです。また、かつて木炭を焼くための山林は大規模に伐採されましたが、永続的に炭焼きができるように約30年周期の輪伐を繰り返し、循環利用してきました。この結果、奥出雲の山々にはブナ林をはじめとする自然豊かな森が多く残り、四季折々の彩を見せて人々の心を癒してくれています。

鉄穴流しで採取した砂鉄と山林で焼いた木炭は、「山内」と呼ばれる製鉄工場に集められました。山内は、たたら製鉄の従事者だけで構成される100人から200人規模の小さな鉱山町で、カツラの木をご神木として金屋子神を祀り、住居と製鉄施設を構えていました。鉄師（たたら経営者）は、町から離れた清流沿いの谷あい独立した山内集落をつくることによって、その技術を継承し、たたら製鉄を守ってきました。

このように、たたら製鉄は、山内を中心として原料と燃料を継続的に手に入れられるとともに、“人”と“自然”とが共生する持続可能な産



神秘的な炎を舞い上げる たたら製鉄



広く信仰を集める金屋子神社（総本社）



棚田に小山が点在する奥出雲の独特な景観



想像を絶する山々を切り崩した「鉄穴流し」



操業当時の姿が残る菅谷たたら山内

業であったと言えます。

たたら製鉄によりもたらされた文化・産業

奥出雲で生産された鉄は次から次へと牛馬や川舟によって安来などの港へ運ばれ、北前船交易の主要な荷として全国各地へ送り出されました。港と奥出雲を結ぶ街道は鉄輸送によって人の往来が増え、街道筋の宿場町や温泉は大いに賑わいました。港町・安来は、鉄の集積地として人々が交わる拠点となり、各地の船頭が唄う民謡などの影響を受けて「民謡安来節」が生まれ、ユニークな「どじょうすくい踊り」とともに全国に知られています。

また、鉄の交易によって多くの富とさまざまな文化が集まりました。製鉄業で財をなした鉄師たちは、収める品ごとに数多くの土蔵を建て、都で見られるような豪華な茶室や庭園を自邸に構えて「不昧」と号した松平治郷をはじめとする歴代松江藩主をもてなしました。労働者たちは、鉄師から聞いた京都の「祇園祭り」の様子を模して、太鼓を叩く稚児を乗せた山車が練り歩く「大呂愛宕ばやし」を思いつき、ハレの日を演出して楽しみました。

一方、農村部では、鉄穴流しで大規模に切り崩した跡地にまず蕎麦などの種を蒔いて土をつくり、その後、稲を植えて、広大な棚田をつくりあげました。このようにして生産された蕎麦は幕府にも献上され、良質米は大阪に送られるほど高い評価を受けました。

たたら製鉄は、単に鉄をつくっただけでなく、地域産業の発展を支えながら、格調高い文化を育んでいったのです。

たたら製鉄が紡ぐ持続可能な社会

出雲地方は、スサノオのヤマタノオロチ退治神話の舞台でもあります。現在も伝承地が点在し、各地で舞われる神楽が神代の世界を伝えています。この神話に登場するヤマタノオロチを、砂鉄採取の影響で氾濫する川になぞらえ、退治したオロチから取り出された剣を製鉄の象徴に、イナタヒメは砂鉄採取の跡地に拓かれた稲田に見立て、「たたら製鉄の歴史」と重ね合わせながら語り継がれてきました。

たたら製鉄は、産業としては100年ほど前に終焉を迎えましたが、その技術は今も絶えることなく世界で唯一この地で伝承されています。流通の拠点として賑わいを見せた港町は今や全国有数のハガネの産地へと発展し、たたら製鉄の技術を受け継ぐ高級特殊鋼「ヤスキハガネ」が現代の“ものづくり”を支えています。また、鉄穴流しにより拓かれた耕作地では全国に名高い「出雲そば」や「仁多米」を育み、多くのファンを魅了しています。

今もなお、この地は先人がたたら製鉄千年の歩みの中で生み出した特徴豊かな地域の文化と産業、自然景観に満ち溢れ、終わることのない物語を紡ぎ続けています。



全国に知られる安来節とどじょうすくい踊り



不昧公も愛でた鉄師の庭園で行われる茶会



鉄師が京都から持ち帰り 300 年続く伝統芸能



ヤマタノオロチ退治の神話を伝える神楽



今も残る 鉄師が暮らした街並み

ストーリーの構成文化財一覧表 (雲南市、安来市、奥出雲町)

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の所在地 (※4)
1	菅谷たたら山内 すがや たたらさんない	国指定重要 有形民俗文化財	操業当時の姿が世界で唯一現存する「菅谷たたら山内」は、たたら製鉄によって隆盛を極めた往時を彷彿とさせる。映画「もののけ姫」の〈タタラ場〉のモチーフとなったことでも知られ、“本物”だけが持つ独特の空間と周囲の景観は、訪れる者を圧倒する。ここは、たたら製鉄に従事した職人やその家族たちの生活や息遣いを、時空を飛び越えて体感することができる稀有な場所である。	雲南市
2	萱ノ鉄穴場跡 かやの かんなぼあと	未指定 史跡	「菅谷たたら山内」の経営者・田部家に残る古絵図（明治初年頃か）にも記される鉄穴場で、切羽（採掘場）、走り（水路）、選鉱施設のすべてが現存する。菅谷たたら山内と合わせて見学することで、原料砂鉄の採集から製鉄に至る一連の工程を理解することができる。	雲南市
3	田部家土蔵群 と 吉田 の街並み ・鉄の歴史博物館 ・大鍛冶屋跡	未指定 文化的景観	松江藩鉄師頭取・田部家のもとで「企業城下町」として栄えた吉田の街並みは、自然の地形を利用しながら機能的に作られている。土蔵群に代表される田部家本宅を中心とした有力者が住む本町通り、寺院が立ち並ぶ山側エリア、飲食、日用品店、小鍛冶屋などサービス機能を持つ川原町筋、吉田川を挟んだ反対側は大鍛冶場や職人の長屋がある鍛冶屋原。それぞれの異なるエリアが小路を通じて有機的に結びついており、今でも往時の面影を垣間見ることができる。	雲南市
4	菅谷 鑪 製鉄用具 141点 すがや たたらせいてつようぐ	県指定有形 民俗文化財	「菅谷たたら」で用いられた製鉄用具。各操業工程の道具が残っており、たたら製鉄の作業を具体的に示す。道具の使用痕や傷を通して、当時の製鉄現場での熱気や職人たちの息遣いを感じることができる。「鉄の歴史博物館」で常時観覧可能。	雲南市
5	大鍛冶屋道具 10点 おおかじやどうぐ	市指定有形 民俗文化財	火箸やアテガネ（地金を鍛錬するときに使う台）など大鍛冶職人が使っていた道具。現在では失われた大鍛冶技術を理解するうえで貴重な資料群。「鉄の歴史博物館」で常時観覧可能。	雲南市
6	槻の屋神楽 大原神 職神楽	県指定 無形民俗文化財	当地方が舞台となるヤマタノオロチ退治神話では、「ヤマタノオロチ」は、砂鉄採取の影響でたびたび氾濫する「斐伊川（ひいかわ）」をイメージし、オロチの尾から顕出した「天叢雲剣（あめのむら	雲南市

	うしおさんのうじかぐら 海潮山王寺神楽 うしおじんだいかぐら 海潮神代神楽 ひのぼりかぐら 日登神楽 きせかぐら 佐世神楽	市指定 無形民俗文化財	くものつるぎ)」はたたら製鉄によって生まれる日本刀を象徴し、「イナタヒメ」は砂鉄採取の跡地に拓かれた稲田に見立てられて伝えられる。これを現代に伝承する神楽の世界は、たたら製鉄が当地の生活・文化と切り離すことのできないものであったことを表している。	
7	りゅうづ だき 龍頭が滝 や え だき 八重滝	県立自然公園 日本の滝百選	たたら製鉄と「水」との関わりは深い。たとえば、砂鉄採集のための鉄穴流しには大量の水を必要とし、鉄塊を細かく砕く錘を持ち上げ、炉へ風を送るには水車を動力源としていた。現在、景勝地として知られる両瀑布の近くには、鉦跡（八重滝鉦跡）や鍛冶屋跡（滝谷鍛冶屋跡）が存在し、自然環境を十分に利用した「たたら経営」が行われていたことをうかがわせる。	雲南市
8	か な や ご じ ん じ ゃ 金屋子神社	県指定 有形文化財	たたら神様「金屋子神」を祀る金屋子神社の総本社。たたら製鉄盛行期の江戸時代後期には中国山地一帯に広範な信仰圏を築いた。金屋子神は現在も鉄の祖神として鉄産業に関わる人々の尊崇を集めている。	安来市
9	金屋子神社と にしひだ 西比田の町 ・市原たたら（未指定史跡）	未指定 文化的景観	能義郡と仁多郡を結ぶ街道沿いに位置する西比田の町は、たたら製鉄の発展とともに金屋子神社参拝の拠点として賑わいを見せた。参道の起点に立つ石灯籠が往時を偲ばせる。また、この地の市原たたらは神社にちなんで金屋子たたらとも呼ばれ、江戸後期から大正末期まで操業された。	安来市
10	た ま は い ね せ い ぞ う 玉鋼製造 （たたら吹き） 伝 承	国選定 保存技術	1300年間にわたり連綿としてこの地の職人だけに継承される世界唯一の製鉄法。炎が燃え上がる様子は、金屋子神の存在を感じさせるほど神秘的であり、職人の卓越した技術により執り行われる作業は今日の先端技術でも説明できないほど緻密なものである。まさに、ものづくりの原点であり、世界に誇る日本の技である。	奥出雲町
11	た け ざ き 竹崎のカツラ	国指定 天然記念物	鉄の神様金屋子神が宿るとされるカツラの木は赤く芽吹き、その後、緑色、黄色へと葉の色が変化する。新芽が赤く染まるのは、たたら製鉄の火入れにかかる日数と同じ三日三晩だと言われる。赤く燃えるように天へ向かって伸びる新芽はたたら赤い炎をイメージさせ、製鉄のご神木として保護されてきた。我が国の自然崇拝の文化と、人と自然との共生の精神を垣間見ることができるたたら製鉄のシンボリック存在である。	奥出雲町

12	奥出雲たたら製鉄 及び棚田の文化的景観	国選定重要 文化的景観	たたら製鉄に用いる砂鉄を採取した鉄穴 流しの跡地は、棚田として整備され今に 輝きを放つ。この棚田が、米どころの西 の横綱として「仁多米」を生み、多くの 食通をうならせている。先人が成し得た 文明と自然との共生というストーリーを 今日に伝える象徴である。	奥出雲町
13	鳥上木炭銑工場角炉	国選定 重要文化的景観 国登録 有形文化財	たたら製鉄技術を受け継いだ角炉が残さ れており、製鉄の近代化を物語る建造物。 ほぼ完全な形で保存されている角炉は、 たたら製鉄の近代化を知るうえで、欠く ことのできない遺産である。	奥出雲町
14	櫻井家住宅	国選定 重要文化的景観 国指定 重要文化財	たたら製鉄で財をなした鉄師頭取の住ま い。贅を凝らした佇まいは、往時の松江 藩主・松平不昧公の御成の際の本陣宿を つとめ、以後藩主が六度も訪れたという。 戦国の世を潜り抜けて財を築いた櫻井家 の歴史と、たたら製鉄の繁栄ぶりを物語 る建造物である。	奥出雲町
15	絲原家住宅	国選定 重要文化的景観 国登録 有形文化財	たたら製鉄で財をなした鉄師頭取の住ま い。元はたたら製鉄の原料である砂鉄を 採取した場所を出雲流庭園として築庭し ている。贅を凝らした佇まいは、松江藩 主のほか国内外の文化人も多く訪れたと され、彼らによりもたらされた数々の文 物は、たたら製鉄の繁栄ぶりを物語る。	奥出雲町
16	鬼舌振	国名勝及び 天然記念物	出雲国風土記に玉日媛命の伝承を残し、 かつて木炭を焼く鉄山林であった。鉄師 絲原家の招きで与謝野鉄幹・晶子夫妻な どの文人墨客が訪れるなど、たたら製鉄 と繋がりのある名勝地である。	奥出雲町
17	陰地たたら跡	国選定 重要文化的景観 県指定史跡	中世から近世にかけてのたたら製鉄技術 の変遷を理解する上で欠くことのできな い遺跡である。	奥出雲町
18	羽内谷鉦山 鉄穴流し本場	国選定 重要文化的景観 町指定 有形民俗文化財	砂鉄採取をする鉄穴流しの最終工程の遺 構で、巧みに水流で比重選鉦する鉄穴流 しの技法を知ることのできる設備であ る。	奥出雲町
19	旧卜蔵氏庭園	国選定 重要文化的景観 町指定名勝	スサノオが降臨した船通山を仰ぎ見る庭 園。たたら製鉄で財を成した鉄師の佇ま いを物語るもので、庭園師重森三令も絶 賛した。神話とたたらを重ね合わせ、悠 久の時を感じさせる。	奥出雲町
20	原たたら (最雲たたら) 跡	国選定 重要文化的景観 町指定史跡	たたら山内の遺構がほぼ完全な形で残 る。昭和 52 年に、たたらを復活させた安 部由蔵村下が操業した鉦で、たたら の 聖 地である。	奥出雲町
21	槇原たたら角炉	国選定 重要文化的景観	角炉は、たたら製鉄から近代化を図った 我が国独特の技術を示す重要な遺構であ る。ほぼ完全な形に復元された近代化遺 産である。	奥出雲町

22	ト蔵新田 ぼくらしんでん	未指定 名勝	享保 6 (1721) 年に奥出雲の鉄師ト蔵家から現在の安来市荒島町に分家したト蔵孫三郎は、日白地区をはじめとする各地で砂鉄採取の「鉄穴流し」の手法により水田を造成した。たたら製鉄の技術が現在の当地の農業を育んできたという歴史を体感できる。	安来市
23	たたら製鉄用具 250点	国指定重要 有形民俗文化財	製鉄炉に風を送る装置「天秤鞆」をはじめ、砂鉄採取、築炉、製錬、選鋼など、たたら製鉄の作業を具体的に知ることのできる用具 250 点。身近な樹木を加工して作られており、その形状や重さなどに、先人の工夫と自然との共生を知ることができる。和鋼博物館で観覧可能。	安来市
24	日本刀 こばやしとくし こばやしりき (小林貞俊・小林力夫)	県指定 無形文化財	「サムライの魂」と言われる日本刀の鍛錬を実演公開している刀匠。奥出雲の地でたたら製鉄により生み出された玉鋼は、同じく奥出雲の匠により日本刀へと姿を変える。職人から職人へと玉鋼（モノ）をつないで、一本の刀（逸品）をつくっていくシステムは、たたら吹きと併せて日本のものづくりの原点と言える。	奥出雲町
25	たたら絵巻 たまはね 「玉鋼縁起」	市指定文化財	安来出身の画家松本 春々が昭和 21 年に制作した幅 30cm、長さ 55m に及ぶ、たたらの一大絵巻。たたら守護神「金屋子神」の降臨から始まり、神話や伝承の中の鉄文化、たたら歴史的変遷、作業や設備・道具、そして安来がたたら伝統を受け継ぎ近代に特殊鋼の生産拠点に成長する過程を、水墨淡彩の軽妙な筆使いで表現している。和鋼博物館のビデオモニターで観覧可能。	安来市
26	安来港と安来の 街並み ・旧雲伯鉄鋼合資会社 やまねろう ・山常楼 (国登録有形文化財) ・並河家住宅 (県指定有形文化財)	未指定 文化的景観	江戸時代から明治時代にかけて、安来は周辺の山間部で生産された鉄を北陸や関西へと運ぶ鉄の積出港として栄えた。その後、明治後期には地元資本の会社がたたら製鉄の伝統技術を近代製鋼技術に発展させ、良質の鉄鋼を生産するようになった。安来の港と街並みは、商いの町から鉄鋼生産の町へと歩んできた「ハガネの町安来」の歴史を物語っている。	安来市
27	民謡安来節 やすぎぶし	市指定 無形文化財	安来節は鉄の積出港として栄えた安来で生まれた民謡。その歌詞には鉄の運搬の様子など鉄に関連した内容が随所に唄い込まれている。軽快な歌声は港町の賑わいに花を添えた。	安来市

28	飯梨川と赤江の新田 開発	未指定 文化的景観	安来市広瀬町から安来平野を経て中海へ注ぐ飯梨川。上流部の布部、山佐などでは江戸時代から「鉄穴流し」による砂鉄採取が行われた。その土砂は下流域の扇状地に何度も洪水をもたらし、長い年月をかけて安来平野を形成してきた。とりわけ赤江地区ではその土砂を利用して大規模に新田開発が行われた。たたら製鉄は現代の我々にも恵みを与えている。	安来市
29	大呂愛宕ばやし	未指定 無形民俗文化財	鉄師ト蔵家がもたらした、300年の歴史を持つ祭り。労働者とたたら経営者との結びつきと、たたら製鉄と地域文化のつながりを理解できる伝統芸能である。	奥出雲町
30	竹崎十七夜	未指定 無形民俗文化財	鉄師ト蔵家がもたらした祭り。火伏の神である秋葉大権現を祀る伝統芸能。火を操るたたら製鉄と地域文化及び信仰を知るうえで重要な行事である。	奥出雲町

※複数ページにわたっても可

構成文化財の写真一覧

①菅谷たたら山内



(撮影：繁田 諭)

②萱ノ鉄穴場跡



③田部家土蔵群と古田の街並み



④菅谷鑪製鉄用具、⑤人鍛冶屋道具



⑥櫓の屋神楽、大原神職神楽、海潮山王寺神楽、 海潮神代神楽、日登神楽、佐世神楽



⑦龍頭が滝、八重滝



⑧ ^{かなやご}金屋子神社



⑪ ^{たけざき}竹崎のカツラ



⑨ ^{にしひだ}金屋子神社と西比田の町



⑫ 奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観



⑩ ^{たまはがね}玉鋼製造（たたら吹き）伝承



⑬ ^{とりかみもくたんせんこうじょうかくろ}鳥上木炭銚工場角炉



⑭ きくらいけ 櫻井家住宅



⑰ おんち 陰地たたら跡



⑮ 絲原家住宅



⑱ はなだにこうざん 羽内谷鉾山 かんなが 鉄穴流し本場



⑯ おにのしたがる 鬼舌振



⑲ ぼくら 旧卜藏氏庭園



②⑩^{はら}原たたら（^{叢雲くも}叢雲たたら）跡



②③たたら製鉄用具250点



②⑪^{まきはら}横原たたら^{かくろ}角炉



②④日本刀（^{こばやしきだとし}小林貞俊・^{こばやしりきお}小林力夫）



②②^{ぼくら}卜蔵新田



②⑤たたら絵巻「^{たまはがねえんぎ}玉鋼縁起」



写真は「たたらの実況」

やすぎ やすぎ
②⑥ 安来港と安来の街並み



おおろあたる
②⑨ 大呂愛宕ばやし



やすぎ
②⑦ 民謡安来節



たけぎまじゅうしちや
③⑩ 竹崎十七夜



いいたし あかえ
②⑧ 飯梨川と赤江の新田開発



日本遺産を通じた地域活性化計画

認定番号	日本遺産のタイトル
034	出雲國たたら風土記～鉄づくり千年が生んだ物語～

(1) 将来像 (ビジョン)

【これまでの経過】

「たたら（日本古来の製鉄法）」は 1400 年間、この地に息づく産業であり、地形や民俗、政治、経済の形成にも大きな影響を与えてきた。このため圏域には独特の文化や景観・風俗が存在している。日本遺産構成文化財をはじめ、今日この地にあるものの大部分が「たたら」にゆかりがあると言っても過言ではない。

昭和 62 年、たたら製鉄の歴史文化をともに歩んできた 6 市町村が、旧自治省リーディング・プロジェクトの指定を受け「鉄の道文化圏」を結成。各地域に拠点となるたたら製鉄ゆかりのテーマを持った施設を整備し、文化圏形成のための条件整備を行った。また、このハード整備に併せて、広域連携のマネジメント組織である鉄の道文化圏推進協議会を組織し、圏域内での連携を深めながら地域振興と地域間交流に取り組んできた。

平成の市町村合併を経て現在は、安来市・雲南市・奥出雲町の 2 市 1 町にその理念は引き継がれ、35 年以上にわたり鉄の道文化圏推進協議会を運営している。

【日本遺産の取り組み】

平成 28 年の日本遺産認定を契機に、これまでたたらに直結する文化財活用が中心であった取り組みに、産業や観光的側面が加わり、このことが大きな転換点となった。「たたら」ストーリーを観光振興や地域振興に結び付けていくことで、「鉄の道文化圏」というエリアブランドの確立を図ることができた。

しかしながら、31 件の構成文化財を軸に捉えた活用であり、誘客や経済への波及効果は十分であったと言えない。とくに、観光活用に関してはモデルコースの設定などを進めてきたが、魅力不足あるいは難解であるという印象から十分に浸透することができていない。今後はより一層、文化財単体から文化・景観・民俗・風土などを含めた「ストーリー」での活用・付加価値化、それらの地域経済への寄与が求められている。

本計画では、推進体制の見直しを図るとともに、「たたら」に関連する官民学商工分野の団体との連携強化を目指していく。アライアンス化を図ることで、観光・小売り・サービス業など産業との融合を進め、地域経済の循環を促すことで持続的な取り組みを目指していく。また、核となる 3 館（※）については、圏域のゲートウェイとして位置付けを明確化し、来訪者への情報発信機能の強化、情報収集の利便性向上、周遊促進、地域経済への波及などにつなげながら、地域活性化計画の自立・自走化を図っていく。

※和鋼博物館（安来市）、菅谷たたら山内（雲南市）、奥出雲たたらと刀剣館（奥出雲町）

【未来のあるべき姿】

「たたら製鉄」は、単に良鉄をつくり出ただけでなく、鉄穴流しによる砂鉄採取法によって山を切り崩した跡地を棚田へと再生してきた。燃料である木炭生産は単に木々を伐採するのではなく、数十年サイクルで循環させることで広大な森林を守ってきた。たたらは自然と共生した産業であり、影響を受けてきた自然や景観、食など、この地独自の文化は今日も続いている。

私たちが目指すものは、たたらが生み出したこの地域こそ現代社会が求めている SDGs（持続可能な開発目標）の原点であること、世界でオンリーワンの技術であるたたらが日本の発展を支えてきたこと、そして今でも息づいていることなどを、地域住民あるいは事業者自らが再認識することでストーリーの価値を知り、地域外の人々や観光客に、その魅力を自ら語ることができることである。そして、来訪者がたたら製鉄のすばらしさを体感し、圏域内住民はこの地に住んでいることに誇りと愛着を持つことを目標としている。

【上位計画への位置づけ】

▼安来市：「第2次総合計画」（後期：令和2～7年度）では、日本遺産を活用した取り組みの推進を掲げ、たたら製鉄文化の調査研究・活用、関係機関と連携した情報発信を取り組むとしている。安来港や街道による和鉄の集散地であったことに関連付け、ゆかりのある他の日本遺産認定地との連携を深めるなど、日本史を語る壮大なストーリーへと発展させながら情報発信を深化させていく。

▼雲南市：「第2次総合計画」（後期：令和2～7年度）を受けた「第2期雲南市観光振興計画」（令和3～7年度）では、観光の強みと追い風を活かし積極的な取り組みを掲げつつ、観光の柱のひとつである「たたら」が育んだ歴史や伝統、食などを積極的に活用した魅力創出に取り組むとしている。

国内で唯一残る高殿及び山内を核にした「たたら」のまちづくりを官民共同で進めるにあたって、日本遺産というブランド力を活用しながらその魅力を高め、国内外に情報発信することによって誘客を推進していく。

▼奥出雲町：「第2次総合計画」（令和3～12年度）では、観光振興の10年後の目指す姿を、たたら製鉄や自然景勝地などの観光資源を活かした、魅力ある観光サービスを充実させるとともに、近隣自治体との広域連携や情報発信を強化し選ばれる観光地とし、たたら製鉄、美肌観光、神話、自然景勝地、歴史、文化農林業、食などの地域資源を活かした滞在型・体験型の観光商品の充実に努めるとしている。

現在でもたたら操業が行われている稀有な地（日本遺産：日刀保たたらなど）として、日本農業遺産「たたら製鉄に由来する奥出雲の資源循環型農業」や玉鋼を活用した「奥出雲たたらブランド認証制度」といった取り組みによる地域活性化に取り組んで行く。

以上のように、2市1町が日本遺産を活用しながら、三位一体となり協働で取り組むことで相乗効果を発揮し、それぞれ掲げる理念の実現を目指していく。



(2) 地域活性化計画における目標

目標①：地域住民や国内外からの来訪者が日本遺産のストーリーに触れ、その魅力を体験すること

指標①－A：日本遺産のストーリーについて理解・関心を深めた来訪者の割合

年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	25,757 人	19,901 人	18,614 人	20,000 人	23,000 人	26,000 人
指標・目標値の設定の考え方及び把握方法		・ゲートウェイと位置付けている主要施設 3 館の入込客数とし、島根県観光動態調査（各年 1 月～12 月）の報告数値を設定する。和鋼博物館（安来市）、菅谷たたら山内（＝山内生活伝承館）（雲南市）、奥出雲たたらと刀剣館（奥出雲町） ・コロナ禍前の令和元年を基準とし、目標年に回復を目指す。				

目標②：地域において日本遺産のストーリーが誇りに思われること

指標②－A：地域の行事に参加していると答えた児童の割合

年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	84.1%	—	72.7%	77.0%	80.0%	84.0%
目標値の設定の考え方及び把握方法		・持続化のためには未来を担う子供たちの関心の高まりが重要である。圏域内の児童生徒は「ふるさと教育」等で日本遺産構成文化財を学んでおり、その定着度合いを計る。 ・島根県学力学習状況調査における、圏域内の児童が地域行事に参加している割合（小学 6 年生：質問紙調査より）。 ・コロナ禍の影響で地域行事等に制約が生じており、最終年後は 90%を目指す。				

目標③：日本遺産を活用した事業により、経済効果が生じること						
指標③－A：ゲートウェイ3館の入場料等収入総額						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	8,361 千円	6,499 千円	5,165 千円	6,210 千円	7,255 千円	8,300 千円
目標値の設定の考え方 及び把握方法		・日本遺産への関心の高まりによって書籍やグッズなどの関連商品の購買意欲が高まることが予想される。 ・和鋼博物館、たたらと刀剣館、菅谷たたらの入場料、売店販売、体験料等の総合計額とする。 ・コロナ禍前の令和元年を基準とし、目標年に3%増を目指す。				

目標④：日本遺産のストーリー・構成文化財の持続的な保存・活用が行われること						
指標④－A：日本遺産関連事業の協力団体数						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	52 団体	57 団体	61 団体	64 団体	67 団体	70 団体
目標値の設定の考え方 及び把握方法		・圏域内の住民や団体、事業者の協力が不可欠であり、その連携度合いを測るため、事業実施の連携・協力団体（者）数を設定。 ・各市町において1団体/年の増を目指す。 ・たたらを活用したプロジェクトや事業参加団体（者）数をカウントする。				

目標⑤：地域への経済効果も含め広く波及効果が生じること						
指標⑤－A：地域の宿泊者数						
年度	実績			目標		
	2019 年	2020 年	2021 年	2022 年	2023 年	2024 年
数値	83,107 人	65,772 人	70,542 人	71,000 人	77,000 人	83,000 人
目標値の設定の考え方 及び把握方法		・鉄の道文化圏推進協議会構成自治体（2市1町）の宿泊客数 ・島根県観光動態調査（各年1月～12月）における宿泊客数の数値を引用する。 ・コロナ禍前の令和元年を基準とし、目標年に回復を目指す。				

(3) 地域活性化のための取組の概要

1. 日本遺産推進事業の運営組織体制の強化

【現状と課題】

これまで日本遺産の推進については行政主導で実施してきたため、民間団体に対しては取り組み内容が十分に伝わらず、連携が不足していた反省点があげられる。このため、民間団体と連携した一体的な日本遺産事業の推進のための運営体制の強化が必要である。

【対策と取組】

日本遺産推進事業の組織及び運営方法の見直しについては、民間事業者や団体など目指すべき日本遺産の活用について共通理解のもと一致団結して取り組む体制を構築し、事業推進の活性化を図る。とくに、かつてたたらを操業していた鉄師御三家（櫻井家・田部家・絲原家）の協力・連携は不可欠であり、民間事業者とともに会議に参画してもらい、協働した事業を進めていく。このことは、官民の情報の共有化が進められるとともに、事務局への情報集約が図られ対外的なワンストップ窓口化にもつながる。

また、自治体間でのさらなる事業調整等の強化と全体の組織運営の構築、計画の円滑な実施のため、総会・企画調整会議・プロジェクトチーム会議での検討事項を明確するとともに民間の視点を踏まえた PDCA サイクルを回していく体制づくりを進める。

●既設の「日本遺産活用プロジェクトチーム」を拡大改組

●情報のワンストップ窓口化

2. ゲートウェイ機能の強化

【現状と課題】

圏域の各市町には、日本遺産の構成文化財等を紹介する施設「和鋼博物館（安来市）」「菅谷たたら山内（雲南市）」「奥出雲たたらと刀剣館（奥出雲町）」があり、それぞれに特色ある位置づけのもとに整備されてきた。しかしながら、日本遺産ストーリーのガイダンスが十分ではなかったため、今後はゲートウェイとしての機能強化が求められている。

【対策と取組】

3館には関連する数々のサブストーリーがあり、そこを起点としたマイクロツーリズムのモデルルートの提案をしていく必要がある。旅行者への適切な情報提供（旅・食・宿・特産品など）、周遊を促すことで、圏域内での滞在時間を延ばし、圏域での経済効果を高めたり、旅行者の満足度を向上させたりする取り組みを進めていく。また、壮大な日本遺産ストーリーへの誘導を図っていく。

今後は、統一的なデザイン物の設置や印刷物の配架などによって重点的にゲートウェイ機能を強化し、来訪者が日本遺産のストーリーに興味を持てる仕組みづくりを行う。他の構成文化財の紹介やモデルルートの提案のみならず、旬の情報や民間事業所の取り組みなど幅広い情報を収集できるような機能を持たせる。

また、ゲートウェイ機能を補完する意味でも、コーディネートできる人材や観光ガイドなどの育成と活用が急務である。

●3館のガイダンス機能強化

●プロデューサー育成と活用

※観光客目線に立った商品企画等を提案・実践できる人材

●プレイヤー育成（観光ガイド、商品開発事業者、サービス提供者など）

※広域でのガイドが可能かつ他の構成文化財等へ誘導できる人材。

※ストーリーを活用した土産品や料理、あるいは体験サービスを提供できる人材。

3. 持続的な取り組み（観光事業化）

【現状と課題】

前計画ではロゴマークやポスター、パンフレットを作成するなど、エリアブランド化を図り一定の認知度向上（※しまねの観光認知度調査結果）が図られた。しかし、圏域内の官民を含め、消費者目線に立ったストーリー関連商品の企画販売、あるいは旅行商品の造成など、十分な活用が図られたとは言い難い。日本遺産の持続的な取り組みのためには、より一層の民間事業者を巻き込んだ展開が急務である。

【対策と取組】

前述のゲートウェイ施設の強化によりたたら製鉄によって育まれた地域の物産の情報発信を重点的に行い、民間事業者の商品開発を促す条件整備を行う。さらに、商品化に向けた専門家によるセミナー等を開催していく。また、協議会ホームページや SNS 等でも民間の取り組みを積極的に発信し、PR 強化を図っていく。

一方で、日本遺産の活用を進めるには、圏域に住む住民がこの地のストーリーを知り、理解していく必要がある。現在、学校教育では全ての児童・生徒が構成文化財を学ぶ機会があり、引き続き教育機関と連携しながら取り組んでいく。社会人への機会提供は、各市町が実施するシンポジウムや講座等の共有を進め、それぞれの特色ある学びの場を提供していくと共に、住民たちには「たたらガイド」等の担い手として活躍の場を検討していく。

●旅行会社が造成するツアー商品へのコンテンツ提供（文化財活用から文化活用へ）

●民間による地域の特産品の商品化、商品に触れる機会の創出

●民間事業者の事業参入への支援

●SNS 等の活用

●教育旅行の素材として活用、学習機会の提供

4. 整備

【対策と取組】

現在は、特定の棚田や町並み等に対する保護政策を実施している。循環型産業である「たたら」によって残されてきた景観や、独自の文化によって発展してきた町並みなどについては、次世代につなげるとともに、来訪者に体感してもらうためその保全・活用について強化していく必要がある。

圏域全体での景観計画導入を検討すると共に、前述の普及啓発に関する取り組み等によって、景観に対する住民意識の向上を図っていく。また、町並みの保全に関しては、空き家について一部住民団体での有効活用の動きがあることから、協議会としても支援を行っていく。

●奥出雲町景観計画（平成 24 年 4 月 1 日）

●日本の棚田百選：山王寺の棚田、大原新田の棚田

●西灘の町並み（まちかど研究会）等

（５）日本遺産の取組を行う組織の自立・自走

【組織体制の強化】

前述のとおり、事務局体制の強化および民間を交えた新組織の発足により、観光事業化を意識した取り組みを行うことで、圏域内消費を促し地域経済を循環させていく。民間事業所の理解・協力、あるいは新規参入を促しながら当協議会活動への協力団体を増やしていくことで自立・自走化を図っていく。

将来的には、第一段階として専属スタッフによる協議会の運営、第二段階としては当協議会を民間主体によるDMO組織に移管し、自走可能な体制づくりを検討していく。

【外部団体との協働・機能分担】

中海・宍道湖・大山圏域観光局（島根・鳥取５市、DMO）、山陰インバウンド機構（DMO）、圏域内の各観光協会、旅行会社との連携を強化し、モデルコースや新たなコンテンツ（個人・マニア向け体験など）の創出を行い、民間事業者が主体的に日本遺産を活用できるように継続して取り組む。

特に、中海・宍道湖・大山圏域観光局については、本圏域の日本遺産ストーリーと関係するエリアであることから関連地域として連携を強化する。隣接した都市部を有することから、圏域観光の拠点の一つと位置づけ、宿泊及び発着地として情報発信を強化し、誘客や域内消費につなげていく。

- DMO：販売、ガイドのマッチング、着地型ツアー造成等で連携
- 圏域内観光協会：旅行商品、体験コンテンツの企画・販売
- 民間旅行会社等：ストーリーを活用した商品造成

（６）構成文化財の保存と活用の好循環の創出に向けた取組

【文化財の調査研究】

この圏域のストーリーの魅力を高め、遺産として未来に残していくため構成市町において文化財の調査研究、保存に取り組んでいく。

- ・市原たたら跡遺構確認調査（令和３年度～・安来市）
- ・菅谷たたら山内整備事業（平成２４年～・雲南市）
- ・史跡富田城跡整備事業および発掘調査事業（平成２７年度～・安来市）
- ・櫻井家復旧工事（令和４年度～・奥出雲町）
- ・和鋼博物館改修工事（令和５年度～・安来市）
- ・文化的景観の継続調査（平成２３年度～・奥出雲町）

【景観保存に向けた施策】

たたらはこの地の景観や町並みに大きな影響を与えてきており、構成文化財の中にも数多く含まれる。このため、景観や町並み保存、自然環境保護については引き続き積極的に取り組んでいく。

- ・雲南市街なみ環境整備事業助成金交付要綱（平成１７年４月１日）

田部家土蔵群のある吉田町本町通り地区の景観形成に関する支援制度。

- ・国選定重要文化的景観「奥出雲たたら製鉄及び棚田の文化的景観」（奥出雲町）
平成 26 年 3 月 18 日に文部科学省より選定。
- ・奥出雲町景観計画（平成 24 年 4 月 1 日）
- ・県立自然公園指定（構成文化財：龍頭が滝／八重滝、鬼の舌振、富田城跡）

【文化財等を活用した取り組み】

文化財等については来訪者の満足度を高めるとともに、その価値が体感できるよう体験型コンテンツとして積極的に活用していく。

- 体験：日本刀鍛錬実演、日本刀保持体験、天秤ふいご体験、ミニたたら（古代たたら）操業、ミニミニたたら（砂鉄をアルミの粉末で還元させて鉄をつくる体験）、包丁研ぎ教室など
- バーチャル体験：たたら VR
- 民間事業者が行う事業に対する支援など

※体験コンテンツイメージ図

古代たたら操業



天秤ふいご体験



日本刀鍛錬実演



【文化観光推進法の活用】

和鋼博物館（安来市）は、昭和 62 年のリーディングプロジェクト計画当初から圏域 6 館のメインセンターとしての機能を持つ施設として整備された。当時は圏域内の地域間交流や文化振興を主たる目的としている。しかしながら開館後数十年が経過し、その間、地域の文化への理解を深める機会を拡大することで、国内外からの観光旅客の来訪を促進するなど観光振興や地域活性化につなげていくという機能転換が求められている。

今後は同館を拠点に、文化観光推進法における拠点計画の策定及び「文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光推進事業」の活用を検討していく。文化の振興を起点とした文化観光を推進し、国内外からの観光客の来訪を促進することで、観光誘客や地域活性化につなげ、これによる経済効果が日本遺産の構成文化財の保護や活用にも再投資される好循環を創出することを目指していく。

- 文化観光拠点施設を中核とした地域における文化観光推進事業（文化観光拠点施設機能強化事業）の活用を検討

(7) 地域活性化のために行う事業

(7) - 1 組織整備

(事業番号 1 - A)

事業名	事業の全体統括を行う組織の整備		
概要	計画を円滑に実施するべく、関係者間の調整を行う組織を整備する。また、民間企業との連携を強化するための組織体制を構築していく。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	協議会の運営	鉄の道文化圏推進協議会総会では、圏域内の行政トップで目標等の共通認識を図り、強力なリーダーシップのもとに事業を推進していく。また、事業予算についても十分に確保していく。	鉄の道文化圏推進協議会
②	プロジェクトチーム会議設置・拡大	既設の「日本遺産活用プロジェクトチーム」を拡大改組し、民間事業者や観光施設等が参画することで官民の連携やアライアンス化など、運営体制を強化していく。また、同会議には、たたら文化に関する専門知識と観光事業に精通した人材をアドバイザーとして配置し、実践的な商品開発等に取り組んでいく。	鉄の道文化圏推進協議会、関係団体、民間企業
③	圏域内情報の集約化	②によって、日本遺産やたたらに関する情報集約を図り、事務局のワンストップ窓口化につなげていく。	同上
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	鉄の道文化圏推進協議会が実施する事業に対しての行政以外の参画・協力団体（者）数		40 団体
2020 年			45 団体
2021 年			49 団体
2022 年	同上		53 団体
2023 年	同上		57 団体
2024 年	同上		61 団体
事業費	2022 年：300 千円	2023 年：300 千円	2024 年：300 千円
継続に向けた事業設計	日本遺産関連事業費について、行政においてはふるさと納税制度やガバメント・クラウド・ファンディング（GCF）等の活用を検討していく。		

(7) - 2 戦略立案

(事業番号 2 - A)

事業名		事業の進捗管理	
概要		計画の実施状況を把握し、適宜方向修正し目標を達成できるよう、協議会等における情報共有や協議を定期的に行う。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	企画調整会議	鉄の道文化圏推進協議会企画調整会議では、関係市町間の情報共有を定例濃密化することで事業調整を強化していく。地域振興・観光・文化財主管課等とも連携しながら開催する。	鉄の道文化圏推進協議会
②	プロジェクトチーム会議	PDCA サイクルを念頭に、日本遺産活用プロジェクトチームでの民間等からの視点・意見、プロデューサー等からの提言等を勘案しながら、事業内容及び検証を協議するとともに、次年度以降の取り組みに反映させていく。	鉄の道文化圏推進協議会、関係団体
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	企画調整会議の開催回数		4 回
2020 年			3 回
2021 年			6 回
2022 年	同上		12 回
2023 年	同上		12 回
2024 年	同上		12 回
事業費	2022 年： 50 千円 2023 年： 50 千円 2024 年： 50 千円		
継続に向けた事業設計	WEB 会議システム等を活用しながら毎月実施。		

(7) - 3 人材育成			
(事業番号3-A)			
事業名	日本遺産を活用する人材の育成・確保		
概要	日本遺産を活用する人材の育成・確保のため、総合的な企画・立案を行うプロデューサーや事業実施を担うプレイヤーの組織化、既に地域で活躍している人材・事業者との連携等を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	たたらガイド養成	スタートアップ期間では、「出雲國たたらガイドの会」を育成・組織し、来訪者の満足の高まる取り組みを行ってきた。今後は、圏域内各施設等の情報を共有し、各施設やサブストーリーにも誘導を図ることができるガイド技術の向上、そして活用促進に取り組んでいく。	鉄の道文化圏推進協議会、たたらガイドの会
②	たたらガイドの活用・連携	ガイドの活動を適宜 SNS 等で発信するほか、各市町の観光協会窓口やゲートウェイ施設で案内することにより、認知拡大に努める。また、協議会 HP 等を活用し、ガイドの予約受付が可能な体制を構築する。	鉄の道文化圏推進協議会、観光協会、たたらガイドの会
③	プロデューサー・プレイヤーの発掘	各分野での人材把握に務めるとともに、新規事業あるいは起業への支援を行う。この場合、3館で整備するゲートウェイ機能を積極的に活用していく。	鉄の道文化圏推進協議会、事業者、関係団体
④	プロジェクトチーム会議への参画	商品開発、販売など分野別分科会を設置するなど組織化を検討し、活動の活性化を図る。	同上
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	たたらガイドの会から説明を受けたことがある延べ人数		748 人
2020 年			66 人
2021 年			247 人
2022 年	同上		300 人
2023 年	同上		500 人
2024 年	同上		750 人
事業費	2022 年：200 千円 2023 年：200 千円 2024 年：200 千円		
継続に向けた事業設計	スキルアップを図りながらガイド料の適正化に取り組み、自走可能なガイド提供の体制づくりを目指す。		

(7) - 4 整備			
(事業番号4-A)			
事業名	ゲートウェイ・モデルルート整備		
概要	日本遺産ストーリーを体験する上で、圏域の窓口となるゲートウェイ施設の整備を行い、来訪者が容易にその魅力を感じられるようにする。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ゲートウェイ施設の整備	和鋼博物館・菅谷たたら山内・奥出雲たたらと刀剣館をゲートウェイ施設と位置付け、ここに立ち寄ることで圏域内に点在する日本遺産構成文化財へ誘導できるよう日本遺産ストーリーの解説板やモデルルート、関連情報等を展示する。	鉄の道文化圏推進協議会、各施設
②	地域の特産品に触れる機会の創出	①の整備では、仁多米やたたら焔米、出雲そば、ヤスキハガネ製品、たたらブランド商品など、地域の特産品に触れる機会を創出する。これらの商品はサブストーリーへの組み込みや付加価値を高めるための取り組みを行う。	鉄の道文化圏推進協議会、各施設、プロジェクトチーム会議
③	モデルルート整備	3館を起点に、サブストーリーを活用したモデルコースづくりを進め、来訪者への提案、誘導を図っていく。また、ゲートウェイ機能を補完するため、プロデューサーやプレイヤーの活用・連携を図っていく。	鉄の道文化圏推進協議会、たたらガイドの会
④	インバウンド対策	①②③についてインバウンドに対応した整備を併せて行う。	協議会、各施設、外部団体
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	ゲートウェイ3館の入場者数		25,757人
2020年			19,901人
2021年			18,614人
2022年	同上		20,000人
2023年	同上		23,000人
2024年	同上		26,000人
事業費	2022年：800千円 2023年：400千円 2024年：200千円		
継続に向けた事業設計	民間事業所の産品等について露出を増やすなどの支援を行うこと消費につなげ、日本遺産事業への協力体制を構築していく。		

(事業番号 4-B)

事業名		ストーリーに関する施設整備	
概要		ストーリーの体験に必要なとなる施設等の整備や構成文化財保護のための整備	
	取組名	取組内容	実施主体
①	和鋼博物館改修事業	ハガネの街安来のルーツとなるたたら製鉄の魅力をわかりやすく紹介し、その魅力に触れることができる文化観光の拠点と位置づけ、日本遺産に関する情報を入手できるガイド機能の充実を図る。	安来市
②	金屋子神話ストーリー説明版の設置	金屋子神話のストーリーが理解しやすいようイラスト等を入れた説明版を金屋子神社周辺に設置する。	安来市
③	櫻井家修繕	文化観光を実現させるため構成文化財における受入環境整備を行い、付加価値を生み出す。	奥出雲町
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	ゲートウェイ 3 館の入場者数		25,757 人
2020 年			19,901 人
2021 年			18,614 人
2022 年	同上		20,000 人
2023 年	同上		23,000 人
2024 年	同上		26,000 人
事業費	2022 年 : 24,700 千円 2023 年 : 88,400 千円 2024 年 : 88,400 千円		
継続に向けた事業設計	施設や構成文化財の整備を行い、景観・風景への来訪体験、解説内容への満足度を高め、再度来訪したいと思えるように実施していく。		

(7) - 5 観光事業化			
(事業番号 5 - A)			
事業名	ストーリーを体感できる商品の開発・販売		
概要	地域内外の人々に日本遺産のストーリーを体験してもらう事業により経済効果を生み出すため、ガイドツアー、体験コンテンツ、ストーリー関連商品の販売等を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	ストーリーを活用した商品化事業	ツアー商品は文化財活用から文化活用を進め、この地の文化（モノ・コト・自然・風土）が体感できる観光素材を絡めたコース等を旅行会社等に、提案・販売していく。そのため DM0 等の圏域外の団体との連携強化も進めていく。	協議会、民間事業者、プロジェクトチーム会議、各市町、外部団体
②	たたらガイドの活用	3-A で養成したたたらガイドについても、上記に併せてツアー商品として提案・販売していく。	同上
③	体験プログラムの商品化	日本遺産を活用したアクティビティ（サイクリング等）や体験観光（にたたら操業、包丁研ぎ教室、たたら VR 等）など、民間事業者や住民団体等の活動支援を行いながら商品づくりを目指す。このことにより地域消費が図られる仕組みづくりを図る。	同上
④	情報発信（再掲）	4-A や 7-A の事業を活用し、ゲートウェイ施設や HP・SNS で幅広い情報発信を行う。また、圏域内宿泊施設と連携し、OTA を通じた販売を目指していく。	鉄の道文化圏推進協議会、民間事業者、外部団体
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	関連商品数（含ツアー商品）		58 件
2020 年			67 件
2021 年			64 件
2022 年	同上		67 件
2023 年	同上		70 件
2024 年	同上		73 件
事業費	2022 年：1,250 千円 2023 年：1,450 千円 2024 年：1,650 千円		
継続に向けた事業設計	日本遺産を活用した新規ビジネス参入が図られるよう地域内消費を増加させていく。		

(事業番号 5-B)

事業名		たたらを活用したブランド商品の開発・販売	
概要		日本遺産のストーリーの活用をしながら商品化し、ブランド品として販売	
	取組名	取組内容	実施主体
①	たたら関連商品（鐵泉堂、玉鋼を利用した商品、たたら焰米）販売の支援	民間事業者が提供する新商品や販売プロモーションについて、各種媒体等を活用しながら支援していく。	民間事業者、雲南市
②	奥出雲たたらブランド認証制度	刀匠が玉鋼を主材料として製作した製品・商品を認証する制度。ブランド認証製品・商品をとおして、「たたら製鉄」の今日的価値と「奥出雲町」という空間で営まれてきた暮らしの価値を広く世界に発信する。	民間事業者、奥出雲町
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	鉄の道文化圏推進協議会が実施する事業に対しての行政以外の参画・協力団体（者）数		40 団体
2020 年			45 団体
2021 年			49 団体
2022 年	同上		53 団体
2023 年	同上		57 団体
2024 年	同上		61 団体
事業費		2022 年：12,421 千円 2023 年：12,421 千円 2024 年：12,421 千円	
継続に向けた事業設計		民間事業者の商品造成に対し積極的に支援・関与し、日本遺産事業への協力体制を構築していく。	

(7) - 6 普及啓発

(事業番号 6 - A)

事業名		圏域内に対する普及啓発	
概要		地域内において日本遺産の認知・関心を高め、誇りに思えるようにするため、学校教育と連携した普及啓発、地域住民への普及啓発等を行う。	
	取組名	取組内容	実施主体
①	学校教育との連携	教育機関と連携しながらスタートアップ期間に整備した媒体 (DVD・紙芝居・児童書) を活用し、次世代教育を推進していく。日本遺産ストーリーは教育旅行の素材として活用できるため、協力団体とも連携しながら県外へも積極的に情報提供していく。	鉄の道文化圏推進協議会、各市町
②	地域住民への普及啓発	社会人への学習機会の提供については、協議会による開催のほか、構成各市町が特色あるテーマごとに定期的に開催・提供をする。	同上、外部団体
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019 年	児童の学力学習状況調査における地域行事への参加率		84.1%
2020 年			－ (未実施)
2021 年			72.7%
2022 年	同上		77.0%
2023 年	同上		80.0%
2024 年	同上		84.0%
事業費	2022 年 : 1,000 千円 2023 年 : 1,000 千円 2024 年 : 1,000 千円		
継続に向けた事業設計	自治体・施設間の連絡調整により、単独開催の負担減を図りながら効率的な学習機会の提供を行い、継続を図っていく。		

(7) - 7 情報編集・発信			
(事業番号7-A)			
事業名	HP等における情報発信		
概要	日本遺産ストーリーに関する情報とともに、地域内外の人々が来訪する際に必要となる基本的な情報について、HP等において情報発信を行う。		
	取組名	取組内容	実施主体
①	Webサイトの継続的な更新	協議会で設置している日本遺産「出雲国たたら風土記」webサイトにて歴史・文化財等関連スポット紹介、ストーリーの解説、観光情報を提供している。webサイトは多言語に対応。また、Facebook、instagramを活用しながら、それぞれの特性を生かしたきめ細やかな情報提供を行うことで同サイトへの誘導を図る。 4-Aで整備したモデルルート情報や、予約サイトなどの販売チャンネルの掲載を整備していく。	鉄の道文化圏推進協議会、民間事業者、観光施設
②	SNSの継続的発信・来訪者による投稿促進	各種キャンペーンの実施（フォトコンテストなど）により閲覧者の増加を図る。	同上
③	メディアを活用した情報発信	各種メディアを活用しながら①②とともにクロスメディアで戦略的に情報発信していく。	協議会、外部団体
④	日本遺産サミット等でのPR、パンフレット改定等	様々な機会を通じたプロモーションを行う。	鉄の道文化圏推進協議会
年	事業評価指標		実績値・目標値
2019年	島根県「しまねの観光認知度調査」による首都圏在住者が「たたら」に興味関心のある割合。		10.7%
2020年			13.5%
2021年			13.2%
2022年	同上		14.0%
2023年	同上		15.0%
2024年	同上		16.0%
事業費	2022年：1,600千円 2023年：600千円 2024年：600千円		
継続に向けた事業設計	SNS等の無料媒体を活用していくとともに、HP等へは有料広告掲載等を検討していく。		

添付資料１（７ページ：実施体制）

【実施主体】

鉄の道文化圏推進協議会（1987年発足）

▼総会：圏域内首長で構成。年一回開催

▼企画調整会議：２市１町の担当課長で構成。毎月開催。拡大会議（随時）では必要に応じて観光・地域振興・文化財・産業振興・都市計画主管課長を参加させ、総合的な取り組みとする。※プロジェクトリーダーは幹事自治体の首長。

▼日本遺産活用プロジェクトチーム会議

商工団体	安来商工会議所、安来市商工会、雲南市商工会、奥出雲町商工会
観光団体	安来市観光協会、一般社団法人雲南市観光協会、一般社団法人奥出雲町観光協会
旅行事業者	株式会社安来旅行、株式会社伯太観光（安来市）、株式会社吉田ふるさと村（雲南市）、株式会社奥出雲振興（奥出雲町）
文化施設（御三家含む）	中国地方たたら懇話会（和鋼博物館、奥出雲たたらと刀剣館、鉄の歴史村地域振興事業団、絲原記念館、可部屋集成館）
観光ガイド	たたらガイドの会

【協力・連携団体】

島根県	教育庁文化財課、中山間地域・離島振興課、観光振興課
広域観光組織	山陰インバウンド機構（DMO）、島根県観光連盟、中海・宍道湖・大山圏域観光局（DMO）、雲南広域連合
鳥取県	西部事務所（大山山麓・日野川流域観光推進協議会）
その他	公益財団法人日本美術刀剣保存協会

【民間事業者との連携・参画】

分野	具体名	内容
株式会社田部	「たたらノ里づくりプロジェクト」に参画	御三家の一つである田部家では自らがたたらを活用した地域振興会社を立ち上げ、新規事業を展開している。このプロジェクトに積極的に協力し、新産業の創出を支援していく。
住民団体	地域おこし団体	地域住民で組織された地域おこし団体の中には、たたら文化を活用した取り組みを行っているものがある。これらの活動について協議会としても情報発信などで支援していく。また、旅行商品や体験観光に活用できないか検討していく。 (例) 鉄穴流し装置の復元による郷土学習への活用、棚田のライトアップ等

圏域外旅行・運輸会社	東出雲観光、農協観光、クラブツーリズム(株)、JR 西日本など	これまで日本遺産活用プロジェクトチーム会議（PT）への参画は、圏域内の旅行会社（旅行業2・3種）であり圏域外からの誘客を促進することが困難であった。今後はPTへ参画してもらい、協働による旅行商品の企画・販売を進め、圏域外からの誘客を推進していく。
圏域外宿泊施設	松江エクセル東急、松江・出雲・米子市内の宿泊施設など	圏域内には大型宿泊施設が少なく、県内等を訪れる観光客の宿泊は周辺都市部に集中している。都市部宿泊施設を拠点に圏域への来訪を促すため、モデルコースの提案やパンフレット配架などに取り組む。 ※上記に加え、プロデューサー（3 ページ記載）および旅行会社（圏域外）を追加し、観光客目線を意識した商品開発および販売方法など検討することで、実効性のあるプロジェクトを推進する。
教育機関	島根大学・NEXTA「次世代たたら協創センター」	『先端金属素材の聖地・島根』の創出を目指している同センターは、圏域で育まれてきたたたらに由来している。講師派遣やフィールドワークなどの人材育成面で協力していくとともに、たたら文化の価値向上につなげていく。
メディア	地元ケーブルテレビ	圏域内住民への広報はCATV（やすぎどじょっこテレビ、雲南夢ネット、ジョーホー奥出雲）を積極的に活用していく。
DMO（再掲）	山陰インバウンド機構、中海・宍道湖・大山圏域観光局	インバウンド観光に関する情報発信や商品化、コンテンツづくりについては専門組織との協力体制を構築し、効率的な事業展開を図る。また、ガイドの斡旋等、案内機能の一元化等について調整していく。
鉄道会社ほか	木次線利活用推進協議会、JR 西日本	JR 西日本が運行するトワイライトエクスプレス瑞風は、立ち寄り先に構成文化財の一つである菅谷たたら山内を選定している。 また、現在の JR 木次線の前身である「簸上鉄道」は、たたら製鉄の衰退期（大正時代）に木炭・砂鉄の外部販売へ活路を見出すため設立され、山陰と山陽を結ぶ鉄道として重要な役割を担ってきた。現在も構成文化財を結ぶ貴重な路線であり、木次線利活用推進協議会あるいは JR 西日本等と連携を図りながら圏域来訪の利便性あるいは魅力向上を図っていく。 木次線の利用促進を目的として、JR 西日本が運転を行うトロッコ列車「奥出雲おろち号」は、老朽化のため 2023 年度で運行を終了する予定であるが、代替として観光列車「あめつち」の乗り入れや、現行の定期列車の内外装をラッピングするなどした車両の運行が決まっている。